機関番号	研究種目番号	審査区分番号	細目番号	分割番号	整理番号
24301	06	1	9041		0001

平成22年度（2010年度）基盤研究（C）（一般）研究計画調書

平成21年11月 6日
2版

新規

研究種目	基盤研究(C)	審査区分	一般
分　野	時限		
分　科			
細　目	デザイン学		
細目表キーワード			
細目表以外のキーワード	土　サスティナブルデザイン　環境造形		
研究代表者氏名	(フリガナ)	イノウエ　アキヒコ	
	(漢字等)	井上　明彦	
所属研究機関	京都市立芸術大学		
部　局	美術学部		
職	准教授		
研究課題名	土による環境造形とサスティナブル・デザインの可能性		

研究経費（千円未満の端数は切り捨てる）

年度	研究経費（千円）	使用内訳（千円）				
		設備備品費	消耗品費	旅費	謝金等	その他
平成22年度	2,383	841	390	100	300	752
平成23年度	1,719	183	383	900	200	53
平成24年度	890	0	220	470	200	0
平成25年度	0	0	0	0	0	0
平成26年度	0	0	0	0	0	0
総計	4,992	1,024	993	1,470	700	805

開示希望の有無	審査結果の開示を希望する
研究計画最終年度前年度応募	--

研　究　目　的

本欄には、研究の全体構想及びその中での本研究の具体的な目的について、冒頭にその概要を簡潔にまとめて記述した上で、適宜文献を引用しつつ記述し、特に次の点については、焦点を絞り、具体的かつ明確に記述してください（記述に当たっては、「科学研究費補助金（基盤研究等）における審査及び評価に関する規程」（公募要領 56 頁参照）を参考にしてください。）。

① 研究の学術的背景（本研究に関連する国内・国外の研究動向及び位置づけ、応募者のこれまでの研究成果を踏まえ着想に至った経緯、これまでの研究成果を発展させる場合にはその内容等）

② 研究期間内に何をどこまで明らかにしようとするのか

③ 当該分野における本研究の学術的な特色・独創的な点及び予想される結果と意義

研　究　目　的（概要）※ 当該研究計画の目的について、簡潔にまとめて記述してください。

本研究は、建築素材等として市場にある土でなく、地域環境の中にある自然土や再生土を用いた建築的造形活動の場を、美術・工芸・建築・デザイン・土木・伝統的左官技術・土着的身体的技術が相互に交通しあうプラットホームとして組織し、「再生」をキーワードに、環境形成に関わる人間の技術や意識を再配置することをめざす、一種のサスティナブル・デザインの研究実践である。三年間を通じて、土の循環・再生とその技術的造形的可能性の探求、土地造成サイトと土利用の可能性のリサーチ、京都国立近代美術館の企画展における制作実践、フィールドワーク、ジャンルを越えた人的交流と研究会、日本の左官技術や世界の土着的建築技術の再評価と活用、美術・デザイン教育、地域社会への還元を、相互に関連づけながら行っていく。

①研究の背景：

近年、環境意識の高まりとともに、建築デザインの分野においても、土、竹、木、石など、自然素材を用いた制作・研究が活発化している。この動きは、巨大テクノロジーによる従来の建築に抗する等身大の空間造形への希求や、戦争や災害、急激な土地開発等による住環境の破壊や荒廃に対する危機意識とも結びついて、建築家やデザイナー、アーティストによる実験的な小規模建築造形の試みを、世界各地に生み出している（cf. Architecture for Humanity ed., *Design Like You Give a Damn*, NY, 2006. Gernot Minke, *Building with Earth: Design and Technology of a Sustainable Architecture*, Birkhäuser-Publishers for Architecture, 2006, M.Cuilot et A-M.Pirlot ed., *Architecture autrement; Habiter le monde*, Bruxelles, 2006, Ph.Richardson, *XS: Big Ideas, Smal Buiding*, 2001, *XS: Small Structure, Green Architcture*, 2006, *XS: FUTURE*, 2009, A.Rocca, *Natural Architecture*, Milan, 2007, etc.）。また、環境意識の高い欧州では、ランドスケープデザイン−現代芸術−環境哲学をまたぐ学際的研究も現われてきている（cf. Recherche interdisciplinaire "Art-Architecture-Paysage", CHIASMA/MITATE: Rapport final: Le pittoresque aux limites du moderne II , Ecole nationale supérieure d'Architecture de Paris La-Villette, Sous la responsabilité de Philippe Nys, Octobre, 2007）。

しかしながら、高度なテクノロジーが発達した日本では、環境−素材−造形をヒューマンスケールでつなぐこうした横断的研究実践はまだ一部の範囲に留まっているし、エコデザインは、グローバル資本主義市場に依拠したプロダクト開発や住宅産業の振興などの環境ビジネスに傾きがちである。自然素材や伝統的土着的技術の再評価と、建築だけでなく美術・工芸を含む広義の造形技術の問い直しが結びつき、ジャンルを越えて制作哲学や環境意識に働きかけるようなデザイン研究／実践は、まだ質量ともに乏しい状況にある。

②本研究の着想の背景：

本研究代表者の井上明彦は、2005 年以来、高速道路建設で景観が大きく変容する京都市西京区大枝大原野地区において、地域資源を芸術的観点から発掘・表現するプロジェクト（大枝アートプロジェクト http://w3.kcua.ac.jp/~oap/）に取り組んでおり、左官職人との協働による土蔵の再生や、道路建設のために取り壊される予定の民家の江戸期の練り土積み土塀を研究し、地域の土と廃材を用いて地域住民のための小規模なコミュニティスペースを制作することなどを行ってきた。それを通じて、地域から直接得た自然素材を用いた建築現場が、世代やジャンルを越え、地域住民とわれわれ美術家、大工、土木造成に関わる技術者が交わり合う場になることが明らかになった。

また 2006～2007 年度、文化庁新進芸術家在外研修制度およびパリ第 8 大学造形芸術科招聘によるパリ滞在を通じて、美術家としての立場から、欧州の景観デザイナー、建築家、研究者と交流し、環境造形に関する学際的共同研究の一角に参画するなかで、美術・デザイン・建築が分断されがちな日本にはない造形知のネットワークを知った。

研究機関名	京都市立芸術大学	研究代表者氏名	井上明彦

研　究　目　的（つづき）

2008 年 9 月に実施したアフリカ・マリ共和国ドゴン族の集落のフィールドワークでは、土という自然素材による集団的建築造形が、技術の共有・保存・刷新と同時に、コミュニティ意識の醸成に深く関わっていることの認識を得た。一方、国内では、丹波その他の左官職人との交流を通じて、高度なレベルにある日本の左官技術が、近年の著しい社会的需要の低下のなかで社会的な存在場所を失っていること、しかしその技術の保存が、単に文化財的にではなく、日本を含むアジアの被災地復興のために活用することのなかで模索されていることも知った。

これらの経緯を経て、現在、本研究代表者の井上が勤務する京都市立芸術大学において、日本画・彫刻・漆工・陶芸・環境デザインにいたる領域横断的な教員・学生・外部専門家の協働により、土の採取、運搬から建築にいたる過程を実験的環境造形ワークショップとして行っている。本研究は、「素材と技術の再生」をキーワードに、このワークショップをより広く地域環境や関連諸科学との関連のなかで捉え直し、土という自然素材を軸にした学際的なサスティナブル・デザインの研究実践として、さらなる社会的展開をはかろうとするものである。

③本研究の目的と特色：

本研究は、根源的な sustainability をもつ土という自然素材を軸にしたクリエイティヴなプラットフォームの形成をはかる広義の「デザイン学」研究である。そこでは、素材の採取・運搬から造形にいたる研究実践のプロセスにおいて、高度産業文明のなかで分化した建築・美術・工芸・土木技術が、大地に関わる人間の基礎的な環境形成技術として交わり合い、また土に関する知と技術が、地域・時代・ジャンルを越えて相互に交流し合い、サスティナブル・デザインの意識が作り手と地域社会のなかに浸透することをめざす。その目的と特色は、以下の点にある。

（1）土の循環・再生とその技術的造形的可能性の探求：土は古来から建築や陶芸の材料としてだけでなく、化粧材や画材、染色の材料としても用いられてきた。本研究では、建築や陶芸だけでなく、絵画や現代美術を含む多様な参加者の専門領域を活かし、建築壁材としての多様な土素材の創出に加え、画材を含む美術領域のさまざまな素材としての土の可能性を開拓・研究し、作品の試作・制作を行う。

（2）「動く土」リサーチプロジェクト：本研究で用いる土は、建築や美術・陶芸用に製品化された「市場にある土」ではなく、「地域環境の中に見いだされる土」すなわち、自然土、土木工事などから出た残土、また陶芸などの再生土等である。これらは土地から離れ、「動く」ことで素材化されうる。土採取のために、土木事業者や公共機関と連携しつつ、関西圏を中心に大規模な土地造成に伴う「人為的な土の山」のサイトを随時調査し、分類とマッピングによってアーカイブ化していく。これは、将来さらに広範に展開されるなら、景観論や景観デザイン、都市計画に対する新しい視点や実践の手がかりを提供しうる可能性をもつ。

（3）日本の伝統的な左官技術–アジア・アフリカの土着的建築技術–現代美術–デザインの相互交流：世界の建材のおよそ 3／4 は土であり、アジア、アフリカはいうまでもなく、ヨーロッパ、中南米、そして日本でも広く土による建築は見られる。また、大地そのものに造形をほどこすアースワークは 1960 年代以降の現代美術の重要な潮流であり、関根伸夫の『位相／大地』は版築によるものである。土を媒介にして、土着の身体的技術と、日本の左官のような高度な専門的技術、そして現代美術やデザインの知見を交差させ、土および土による建築技術の再評価と新しい環境造形の可能性を探る。ここには、各地のさまざまなフィールドワークも含まれる。

（4）開放系技術と美術・デザイン教育へのフィードバックと社会還元：ある種のオープン・テクノロジーでもある土による造形は、材料採取から運搬、保管、造形にいたるあらゆる段階で地域環境と密接に関わり、サスティナブル・デザインの精神をさまざまな造形領域において育む。すなわち身のまわりの事物や素材に潜む可能性への意識を鋭敏にし、修理や修復を積極的に捉える技術観、再生や循環を意識した制作姿勢や価値観を生み出すことにつながる。これは、美術・デザイン教育を地域環境との人的かつ物質的なつながりのなかに置き直すことでもある。

（5）展覧会における検証と社会的展開：本研究の全期間を通じて、ワークショップ・研究会・展覧会等による社会的展開をはかる。とりわけ次年度（2010 年）、京都国立近代美術館主催の「生存のエシックス」展において、土による仮設建築をワークショップ形式で行い、上記したような、

土をめぐる知見と諸技術が交流しあうプラットホームを提示する。

研究計画・方法

本欄には、研究目的を達成するための具体的な研究計画・方法について、冒頭にその概要を簡潔にまとめて記述した上で、平成２２年度の計画と平成２３年度以降の計画に分けて、適宜文献を引用しつつ、焦点を絞り、具体的かつ明確に記述してください。ここでは、研究が当初計画どおりに進まない時の対応など、多方面からの検討状況について述べるとともに、研究計画を遂行するための研究体制について、研究分担者とともに行う研究計画である場合は、研究代表者、研究分担者の具体的な役割（図表を用いる等）、学術的観点からの研究組織の必要性・妥当性及び研究目的との関連性についても述べてください。

また、研究体制の全体像を明らかにするため、連携研究者及び研究協力者（海外共同研究者、科学研究費への応募資格を有しない企業の研究者、大学院生等（氏名、員数を記入することも可））の役割についても必要に応じて記述してください。

研究計画・方法（概要）※ 研究目的を達成するための研究計画・方法について、簡潔にまとめて記述してください。

本研究は、環境の中に見いだされる自然土および再生土を用いた建築的造形活動の場を、美術・工芸・建築・デザイン・土木・伝統的左官技術・土着的身体的技術が相互に交通しあうプラットホームとして組織し、「再生」をキーワードにして、大地や環境形成に関わる人間の技術や意識を再配置することをめざす、一種のサスティナブル・デザインの研究実践である。三年間を通じて、土の循環・再生とその技術的造形的可能性の実践的探求を軸に、土地造成サイトと土利用の可能性のリサーチ、京都国立近代美術館の企画展における制作実践（初年度のみ）、フィールドワーク、ジャンルを越えた人的交流と研究会、日本の左官技術や世界の土着的建築技術の再評価と活用、造形ワークショップを通じた美術・デザイン教育および地域社会への還元を、相互に関連づけながら行っていく。

［平成 22（2010）年度］

A-1. 土の循環・再生とその技術的造形的可能性の研究

（自然素材を用いた実験制作は、作業や状況との関係が計画を多少とも左右する。以下は研究の順序ではなく、3 年間を通した研究項目である）

①地域における自然土（竹林や田畑）の採取・精製・分類
②土地造成により排出された土や残土の採取・精製・分類
③陶芸用の土からの再生土の作成・分類
④　①～③および水と藁の配合による数種の壁土の製作
⑤竹構造体と土①～③の組合わせによる土壁づくりの実験
⑥①～③の土からの顔料の製作と描画実験
⑦①～③の土からの描画材（パステル等）の製作と描画実験
⑧①～③の土からの陶土の製作と制作実験
⑨①～③の土からの立体造形素材（粘土等）の製作と制作実験（楽器など）
⑩①～③の土による染色実験(泥染め等)

a-1. 竹の素材化と構造体制作実験

地域に広く見られる竹（真竹／孟宗竹）の採取・加工による素材化
⇒竹木舞とその応用による構造体の制作実験

a-2. 藁の採取・保管・加工

壁土づくりのための藁の採取・保管・加工

B. 展覧会「生存のエシックス」展における土の仮設建築の制作・ワークショップ・公開研究会

①「生存のエシックス」展（京都国立近代美術館主催、2010/7/16～8/23）において、A-1～A-3 をふまえた土の建築空間を現場で公開制作する。一般市民も参加できるワークショップとして行う。
②上記の仮設空間の使用による居住性・デザイン性・強度などの検証。
③左官職人や研究者との交流・意見交換を行う。

C-1. 関連文献資料研究

D-1. 民家解体と再生可能な自然素材の抽出・保管・再利用

①高速道路建設のための民家解体の現場から、再生可能な自然素材（土・木）を抽出し、再利用可能な状態で保管する。
②上記の自然素材を用いて、地域住民のためのコミュニティスペースを試作する。＊民家解体は道路工事の進捗により時期が変動する

研究機関名	京都市立芸術大学	研究代表者氏名	井上明彦

研究計画・方法（つづき）
［平成 23（2011）年度］

A-4. 土の循環・再生とその技術的造形的可能性の研究
引き続き土の採取と建築・美術・工芸の素材化研究を行う

D-2.『峠の茶屋 v.3』の制作
解体された民家の壁土や廃材を再利用し、地域住民のためのコミュニティスペースを再制作する。
＊2008 年度に制作・設置した『峠の茶屋 version2』は、2010 年度、隣接民家の解体とともに廃去される。Version3 は、その素材も同時に再利用し、大枝大原野地区周辺の別の土地に仮設する（現在、場所未定）。問題の京都第２外環状道路の完成予定は平成 24（2012）年度末。

E.「動く土」リサーチ・プロジェクト
① 大規模な土地造成に伴う「人為的な土の山」のサイトを、土木事業者や公共機関と連携しつつ、関西圏を中心に随時調査し、アーカイブ化していく（2010 年度より開始）
② 目的は、第一に、土採取のためのサイトの把握。第二に、土地造成の状況の俯瞰と、ランドスケープの変容に対する新たな視点の構築。
③ アーカイブは、サイトおよび土の山の形状の写真、映像、地図、記述からなり、最終年度に展示作品として再構成し、一般公開をはかる。

C-2 関連文献資料研究

G-1. フィールドワーク_1
西アフリカ・マリ共和国ドゴン族の集落における土建築工法の調査を行う。＊2011 年春実施予定

H-1. 土のいえワークショップ
ドゴン西アフリカクラブ所蔵品によるドゴン文化紹介展（毎日新聞社主催予定）において、子供を対象にした土の家づくりのワークショップを行う。

F-1. 異分野交流とワークショップ (1)
京都市立芸術大学に左官職人を招き、講演と技術指導を含むワークショップを行い、美術・デザイン・工芸分野の教員・学生との交流をはかる。

H-2. 京都芸大における実験授業～版築ワークショップ
2009 年夏に行った第１回版築ワークショップの第２ヴァーションを行う

［平成 24（2012）年度］

G-2. フィールドワーク_2
インド・ネパールの土による住居建築の素材と工法の調査

F-2. 異分野交流とワークショップ (2)
京都大学医学部人間健康学科の山根寛教授を招き、作業療法の観点から土と人間活動の関係を探る。

G-3. フィールドワーク_3
ブルキナファソおよびカメルーンの土を主とした住居建築の素材と工法の調査

研究総括：土による環境造形とサスティナブルデザインの可能性
土の素材化研究の成果とその試作品、「動く土」リサーチプロジェクトのアーカイブ、土の仮設建築体の制作展示、シンポジウム等によって研究の総括と社会的公開をはかる

H-3. 京都芸大における実験授業
引き続き、土造形のワークショップ型授業を行う

今回の研究計画を実施するに当たっての準備状況等

本欄には、次の点について、焦点を絞り、具体的かつ明確に記述してください。
① 本研究を実施するために使用する研究施設・設備・研究資料等、現在の研究環境の状況
② 研究分担者がいる場合には、その者との連絡調整状況など、研究着手に向けての状況（連携研究者及び研究協力者がいる場合についても必要に応じて記述してください。）
③ 本研究の研究成果を社会・国民に発信する方法等

① 現在の研究環境・設備状況：本研究代表者の勤務する京都市立芸術大学美術学部は、美術の実技の研究教育を主とする機関で、建築的造形活動を集団で行うための敷地や土木系道具以外の工具は、比較的そろっている。また、地域でアートプロジェクトを数年間にわたって行っているので、近隣の地域住民や土木業者、国土交通省の関連部署との関係も良好である。また次年度予定している「生存のエシックス」展は、京都国立近代美術館の主催で、同館の敷地や疏水近辺を使うことが可能である。しかし、京都市の財政難から研究予算は皆無に等しく、新たな備品や資料の購入、フィールドワークのための資金は決定的に不足している。

② 連携研究者とはすでに協働作業を行っており、連絡調整については問題ない。

③ 研究成果の社会的発信方法：研究目的および研究計画欄で記したように、本研究の一部に 2010 年度の京都国立近代美術館での展覧会「生存のエシックス」と、そこでのワークショップ、シンポジウムが組み込まれており、本研究はそこで中間的に検証される。加えて 2011 年にアフリカのドゴン文化を紹介する展覧会の中でも「土の家づくりワークショップ」を行う予定である。ほかに公開研究会、ワークショップ、インターネットを通じても研究内容の公開をはかる。

研究計画最終年度前年度の応募を行う場合の記入事項（該当者は必ず記入してください（公募要領 16 頁参照））

本欄には、研究代表者として行っている平成 22 年度が最終年度に当たる継続研究課題の当初研究計画、その研究によって得られた新たな知見等の研究成果を記述するとともに、当該研究の進展を踏まえ今回再構築して本研究を応募する理由（研究の展開状況、経費の必要性等）を記述してください。（なお、本欄に記述する継続研究課題の研究成果等は、基盤Ｃ（一般）-8 の「これまでに受けた研究費とその成果等」欄に記述しないでください。）

研究種目名	審査区分	課題番号	研　究　課　題　名	研究期間
				平成　年度～ 平成 22 年度

当初研究計画及び研究成果等

応募する理由

研究機関名	京都市立芸術大学	研究代表者氏名	井上明彦

研究業績

本欄には、研究代表者及び・研究分担者が最近５カ年間に発表した論文、著書、産業財産権、招待講演のうち、本研究に関連する重要なものを選定し、現在から順に発表年次を過去にさかのぼり、発表年（暦年）毎に線を引いて区別（線は移動可）し、通し番号を付して記入してください。なお、学術誌へ投稿中の論文を記入する場合は、掲載が決定しているものに限ります。
また、必要に応じて、連携研究者の研究業績についても記入することができます。記入する場合には、二重線を引いて区別（二重線は移動可）し、研究者毎に、現在から順に発表年次を過去にさかのぼり記入してください（発表年毎に線を引く必要はありません。）。

発表年	研究代表者・分担者氏名	発表論文名、著書名　等 （例えば発表論文の場合、論文名、著者名、掲載誌名、査読の有無、巻、最初と最後の頁、発表年（西暦）について記入してください。） （以上の各項目が記載されていれば、項目の順序を入れ替えても可。著者名が多数にわたる場合は、主な著者を数名記入し以下を省略（省略する場合、その員数と、掲載されている順番を○番目と記入）しても可。なお、研究代表者には二重下線、研究分担者には一重下線、連携研究者には点線の下線を付してください。）
2009 以降	井上明彦 （**研究代表者・以下同**）	・作品「二つの円柱」（ミクストメディア、『2.5 次元』展、ギャラリーマロニエ、京都市） ・作品「gul-gul earth」（写真、『卵』展、ギャラリーSensenchi、静岡市）
2008	井上明彦	・作品「線を聴く」（ミクストメディア、『音箱展』、神戸アートビレッジセンター） ・作品「峠の茶屋計画」（大枝アートプロジェクト、『みどりの停留所』展、京都市西京区大枝） ・作品「月と指」（映像、ミクストメディア、『観月祭：月の図書館』展、CAP Studio Q2） ・作品「ゾウキン」（布、糸ほか、『ぞうきん』展、ギャラリーマロニエ、京都市）
2007	井上明彦	・ワークショップ ”Mitate ou ‘voir comme’ ”, Département d’arts plastiques, Université Paris VIII（パリ第８大学造形芸術学科） ・仏語論文 ” Pour le monde comme ’ready-made’”, *Recherche interdisciplinaire "Art-Architecture-Paysage", CHIASMA/MITATE:Rapport final: Le pittoresque aux limites du moderne II*, Ecole nationale supérieure d’Architecture de Paris La-Villette, Sous la responsabilité de Philippe Nys, Octobre 2007, pp.228-246（芸術-建築-景観の学際的研究「モダンの境界におけるピトレスクの問題」最終報告、フランス文化省提出） ・論文「アンリ・マティス：描くことを描く」『絵画の制作学』藤枝晃雄・谷川渥・小澤基弘編、日本文教出版、2007 年 10 月刊、238～249 頁 ・グループ展『八つの課題：井上明彦・今村源・日下部一司・三嶽伊紗』（ギャラリーヤマグチ・クンストバウ、同企画展、大阪市、井上明彦作品:「打つわ」（アルミ鍛造)、「影」（ネオンほか)、「並べる」（写真)、「笑う」（音、CD)、「犬の生活」（映像)、「W」（ドローイング、オブジェほか)、「おみやげ」（ミクストメディア)、「手入れ」（ミクストメディア)）
2006	井上明彦	・論文「宇宙における植物と人間のインタラクション−ロシア IBMP(生物医学問題研究所)調査研究から」「宇宙庭の今後の研究課題」『宇宙作庭記−宇宙環境における「庭」の創作研究−』（平成 16～17 年度科学研究費補助金基盤研究 C、課題番号 16602012、19-29 頁、45-48 頁)、 ・グループ展『新開地生誕 100 年の饗宴・ドキュメント展』（神戸アートビレッジセンター、2002～2003 年の新開地アートブックプロジェクトより継続） ・グループ展『食と現代美術 part2−美食同源』展（BankART1929、横浜）
2005	井上明彦	編著『共同研究最終成果報告書2：宇宙飛行士インタビュー集』京都市立芸術大学・宇宙航空研究開発機構、2005年3月（平成14-16年度科学研究費助成：萌芽研究「宇宙環境における芸術表現の意義・可能性・方法に関する基礎的研究」課題番号14651011） ワークショップ「原地形を考える：水位／水のゆくえ」（新開地アートストリート、神戸アートビレッジセンター主催、神戸市兵庫区） 作品「レーニンとスターリン、崩壊を見る」（写真、人形他、『散歩の条件−三つの写真レッスン』、ギャラリーマロニエ、京都）＊展覧会はすべて企画による招待出品

研　究　業　績（つづき）

発表年	連携研究者氏名（所属研究機関・部局・職）	発表論文名・著書名　等 （研究代表者及び研究分担者の研究業績として上欄に記載したものは記載しないでください。）
	小清水漸 （京都市立芸術大学美術学部教授・彫刻）	2009、招聘講演：シンポジウム「21 世紀の新しい環境観：COSMOS～大地と人」（主催：財団法人国際花と緑の博覧会記念協会） 2005、著書：小清水漸『木の石の水の色』 1997、作品：「作業台-新月のアルテーミス-」ほか 1990、作品：「水の長持」 1984、作品：「飛ぶかたち」 1981、作品：「作業台-水鏡-」 1971、作品：「表面から表面へ」
	池上俊郎 （京都市立芸術大学美術学部教授・環境デザイン）	2009、モニュメント“AIRNEST 気巣”静岡県三島市 JR 駅北口 2008、the Asia-Europe Dialogue on Arts, Culture & Climate Change / the Asia-Europe Foundation 2007、唐大明宮国立遺跡公園戦略基本構想統括、西安市、中国 2005、SEASIDEFARM・SEAFARM-生命体を利用した大都市近郊自然再生実証装置（グッドデザイン賞新領域デザイン部門 ECOLOGY デザイン特別賞） 2003-2006「既存都市近郊自然の循環型再生大阪モデル」研究代表（独立行政法人科学技術振興機構社会技術研究開発センター“循環型社会”領域） 2000、東町・江戸町ビルを中心とした街区形成（神戸市、グッドデザイン賞建築・環境デザイン部門） 2000、ソーラーチューブ太陽熱利用機器（グッドデザイン賞ファミリーユース商品部門）
	秋山　陽 （京都市立芸術大学美術学部教授・陶磁器）	2009、秋山陽展、アート・コート・ギャラリー、大阪 2009、World Contemporary Ceramics － Adventures of Fire、利川世界陶磁センター、韓国 2008、現代の茶陶展、菊池寛実記念智美術館、東京 2008、秋山陽展、村松画廊、東京 2007、土から生まれるもの、東京オペラシティーアートギャラリー
	長谷川直人 （京都市立芸術大学美術学部教授・陶磁器）	2009、アジア現代陶芸-新世代の交感展、愛知県立陶磁資料館 2009、個展、アートスペース虹、京都 2009、Ceramic Site 2009、ギャラリー白、大阪 2009、遊碗展、ギャラリー器館、京都 2008、個展、ギャルリ・プス、東京 2007、個展、ギャラリー目黒陶芸館、四日市 2007、個展、SILVER SHELL、東京
	栗本夏樹 （京都市立芸術大学美術学部教授・漆工）	＜共同研究＞ 2004.4～2006.3「京都を中心とした日本の伝統工芸の過去・現在・将来」（国際日本文化研究センター、文部科学省科学研究費） 2001.4～2004.4「日本伝統音楽所用楽器のデジタルアーカイブ化研究」（京都市立芸術大学伝統音楽研究センター、文部科学省科学研究費） ＜受賞＞ 2005、国際漆展・石川2005　特別賞 2003、第26回京都工芸美術作家協会展　京都府知事賞（最高賞） 1999、国際漆コンペティション石川’99　審査員奨励賞 1998、大阪市都市環境アメニティ表彰 1996, 第2回 おおさかパブリックアート賞　最優秀作品 1995, 京都市芸術新人賞 1993、第10回 咲くやこの花賞（大阪市文化賞） 1992、第3回 次代を担う作家展　優秀賞

これまでに受けた研究費とその成果等

本欄には、研究代表者及び研究分担者がこれまでに受けた研究費（科学研究費補助金、所属研究機関より措置された研究費、府省・地方公共団体・研究助成法人・民間企業等からの研究費等。なお、現在受けている研究費も含む。）による研究成果等のうち、本研究の立案に生かされているものを選定し、科学研究費補助金とそれ以外の研究に分けて、次の点に留意し記述してください。

① それぞれの研究費毎に、研究種目名（科学研究費補助金以外の研究費については資金制度名）、期間（年度）、研究課題名、研究代表者又は研究分担者の別、研究経費（直接経費）を記入の上、研究成果及び中間・事後評価（当該研究費の配分機関が行うものに限る。）結果を簡潔に記述してください。（平成２０年度又は平成２１年度の科学研究費補助金の研究進捗評価結果がある場合には、基盤Ｃ（一般）－９「研究計画と研究進捗評価を受けた研究課題の関連性」欄に記述してください。）

② 科学研究費補助金とそれ以外の研究費は線を引いて区別してください。

＜科学研究費以外＞

平成 7 年 (1997)、ユニオン造形文化財団研究助成、「公共空間における芸術活動の意義と可能性」、研究代表：井上明彦、研究成果：同研究報告書『公共空間における芸術活動の意義と可能性』

平成 17～20 年度、アサヒビール芸術文化財団助成「大枝アートプロジェクト」研究代表：井上明彦、アサヒアートフェスティバルの公募による。助成金額は年度毎に 300,000～500,000 円

＜科学研究費＞

平成 8～10 年度（1997～1999)、科学研究費助成：基盤研究 A「近代国家における文化的アイデンティティとしての芸術」、課題番号 08301004、研究代表者：金澤弘（京都造形芸術大学芸術学部教授）・研究費総額 9,100.000 円、研究分担成果：論文・井上明彦「彫刻の中の都市−《カレーの市民》とモニュメントの死」 同研究成果報告書、177−193 頁

平成 10～11 年度（1999～2000）科学研究費助成：基盤研究 B「メタ環境としての都市芸術−環境美学研究」課題番号 10410015、研究代表者：井村彰（東京芸術大学美術学部助教授)、研究費総額 13,000,000 円、研究分担成果：井上明彦・論文「作品／空虚／場所―ロバート・スミッソンの《サイトとノンサイトの弁証法》をめぐって」同研究成果報告書、平成 12 年刊、119−134 頁

平成 11～13 年度　科学研究費助成：基盤研究 A「総合研究：20 世紀アヴァンギャルド諸潮流と表象文化の現在―モダンから越境へ」研究代表者：大平具彦（北海道大学文学部教授)、研究分担成果：井上明彦・論文「柱と穴―《終わりなき柱》と大地の変容」(『モダニズムの越境 III―表象からの越境』モダニズム研究会編、人文書院、2002）＊『モダニズムの越境』I,II,III の計三冊は、日本学術振興会平成 13 年度科学研究費補助金研究成果公開促進費により刊行

平成 14～16 年度科学研究費助成：萌芽研究「宇宙環境における芸術表現の意義・可能性・方法に関する基礎的研究」課題番号 14651011、研究代表：井上明彦（京都市立芸術大学助教授、本申請者)、研究成果：井上明彦編著『共同研究最終成果報告書 2：宇宙飛行士インタビュー集』京都市立芸術大学・宇宙航空研究開発機構、2005 年 3 月

平成 16～17 年度　科学研究費助成：基盤研究 C「宇宙作庭記−宇宙環境における「庭」の創作研究」、課題番号 16602012、研究代表者：松井紫朗 (京都市立芸術大学助教授)、研究費総額 4,991,000 円、研究分担成果：井上明彦・論文「宇宙における植物と人間のインタラクション−ロシア IBMP (生物医学問題研究所)調査研究から」「宇宙庭の今後の研究課題」、同研究報告書『宇宙作庭記−宇宙環境における「庭」の創作研究−』2006 年

平成 20～22 年度　科学研究費助成：基盤研究 B「Creative Engagement：宇宙から地球へ―脱領域的アプローチによる芸術のアナザーモデルの研究と実践」研究代表者：高橋悟（京都市立芸術大学准教授)、井上明彦研究分担：「関係概念としての知覚的自己定位の研究」「地形と庭の研究：トポグラフィーのトポロジカルな変換」および展覧会「生存のエシックス／Trouble in Paradise」（京都国立近代美術館主催）に参加

研究計画と研究進捗評価を受けた研究課題の関連性

・本欄には、本応募の研究代表者が、平成２０年度又は平成２１年度に、「特別推進研究」、「基盤研究（Ｓ）」又は「学術創成研究費」の研究代表者として、研究進捗評価を受けた場合に記述してください。
・本欄には、研究計画と研究進捗評価を受けた研究課題の関連性（どのような関係にあるのか、研究進捗評価を受けた研究を具体的にどのように発展させるのか等）について記述してください。

人権の保護及び法令等の遵守への対応（公募要領３頁参照）

本欄には、研究計画を遂行するに当たって、相手方の同意・協力を必要とする研究、個人情報の取り扱いの配慮を必要とする研究、生命倫理・安全対策に対する取組を必要とする研究など法令等に基づく手続きが必要な研究が含まれている場合に、どのような対策と措置を講じるのか記述してください。

例えば、個人情報を伴うアンケート調査・インタビュー調査、患者から提供を受けた試料の使用、ヒト遺伝子解析研究、組換えＤＮＡ実験、動物実験など、研究機関内外の倫理委員会等における承認手続きが必要となる調査・研究・実験などが対象となります。

なお、該当しない場合には、その旨記述してください。

本研究で予定している「動く土」リサーチプロジェクトは、情報公開にあたっては、土地所有者の理解と承諾のもと行う。
また建築造形活動にあたっては、参加者の安全に十分配慮するとともに、場合によっては法令にもとづき保険加入の処置も行う。人権の保護への対応については該当しない。

研究経費の妥当性・必要性

本欄には、「研究計画・方法」欄で述べた研究規模、研究体制等を踏まえ、次頁以降に記入する研究経費の妥当性・必要性・積算根拠について記述してください。また、研究計画のいずれかの年度において、各費目（設備備品費、旅費、謝金等）が全体の研究経費の９０％を超える場合及びその他の費目で、特に大きな割合を占める経費がある場合には、当該経費の必要性（内訳等）を記述してください。

(1) 本研究は、環境造形に使用する材料（土、竹、藁、木）を、市場から購入するのではなく、地域環境の中から調達することを重要な要件としており、材料費自体は少額ですむ。しかしながら、美術系大学には通常そろっていない土木系の工具・道具や関連資料が必要である。また大量の土砂、竹、藁の運搬と保管のため、建機借用料や運送費、各種資材が必要である。
(2) 本研究は、従来の美術系大学では教育研究対象にない建築施工・土木・園芸系分野を対象にしており、左官などの伝統技術や、バナキュラーな建築工法の研究と活用、そのための人的交流を重要なファクターにしている。それゆえ、国内の専門職人の招聘や、アジア・アフリカへのフィールドワークのための費用が必要である。また、国内の造成現場や土による工法例の調査研究に、ガソリン代や交通費が最小限必要である。
(3) ノートパソコンやソフト、GPS は、リサーチとその成果のアーカイブ化、建築物のデザインと検証、研究成果公開（画像・資料・報告書の作成）その他に用いる。

（金額単位：千円）

設備備品費の明細

記入に当たっては、基盤研究（C）（一般）研究計画調書作成・記入要領を参照してください。

年度	品名・仕様 （数量×単価）（設置機関）	金　額
２２	日工モルタルミキサー TMU-35 1個@273,000	273
	マキタカクハン機　UT2400　1個 @27,000	27
	マキタ充電式インパクトドライバ TD131DRFX　1個×@56,000	56
	防音型インバータ発電機ホンダ EU-16i　1個@207,900	210
	防雨型屋外用リール(100V・標準型) 接地付　1個　@40,000	40
	GARMIN GPSmap60CS 1個@120,000	120
	NFS-6P 野積シート　×1（２枚組）	115
23	MacBook Pro 15inch 2.66GHz	183
24		

消耗品費の明細

記入に当たっては、基盤研究（C）（一般）研究計画調書作成・記入要領を参照してください。

品　名	金　額
土嚢（PP強力袋　200枚入）	18
耐候性コンテナバッグ HS002RW　5枚入 6個×@ 24000	144
大型養生シート#3000	18
図書『環境土構造工学』 『Land Art in the U.K.: A Complete Guide to Landscape, Environmental, Earthworks, Nature, Sculpture and Installation Art in the United Kingdom』 ほか	100
シュロ縄	10
印刷費（資料、広報ほか）	100
	323
VectorWorks2009	60
図書資料費	
印刷費（最終報告展広報）	100
写真プリント代(最終報告展展示物)	120

研究機関名	京都市立芸術大学	研究代表者氏名	井上明彦

（金額単位：千円）

旅費等の明細（記入に当たっては、基盤研究（C）（一般）研究計画調書作成・記入要領を参照してください。）

年度	国内旅費		外国旅費		謝　金　等		そ　の　他	
	事　項	金額	事　項	金額	事　項	金額	事　項	金額
22	造成地調査（ガソリン代／交通費）	40			左官職3名招聘（含交通費）	300	フォークリフト・レンタル（月額）	620
	瀬戸内・四国地方調査	60					トラックレンタル @13,230/12h ×10回	132
23	造成地調査（ガソリン代／交通費）	40	西アフリカ・マリ・ドゴン族集落調査	450	左官職人2名招聘（含交通費）	200	トラックレンタル @13,230/12h ×4回	53
	中部地方調査	60	インド・ネパール住居建築調査	350				
24	造成地調査（ガソリン代／交通費）	20	中央アフリカ・カメルーン他住居建築調査	450	左官職人1名＋専門研究者1名招聘（シンポジウムのため、含交通費）	200		

研究代表者のみ作成・添付

研究費の応募・受入等の状況・エフォート

本欄は、第２段審査（合議審査）において、「研究資金の不合理な重複や過度の集中にならず、研究課題が十分に遂行し得るかどうか」を判断する際に参照するところですので、本人が受け入れ自ら使用する研究費を正しく記載していただく必要があります。
本応募課題の研究代表者の応募時点における、（１）応募中の研究費、（２）受入予定の研究費、（３）その他の活動、について、次の点に留意し記入してください。なお、複数の研究費を記入する場合は、線を引いて区別して記入してください。具体的な記載方法等については、研究計画調書作成・記入要領を確認してください。

① 「エフォート」欄には、年間の全仕事時間を１００％とした場合、そのうち当該研究の実施等に必要となる時間の配分率（％）を記入してください。
② 「応募中の研究費」欄の先頭には、本応募研究課題を記入してください。
③ 科学研究費補助金の「新学術領域研究（研究領域提案型）」又は「特定領域研究」にあっては、「計画研究」、「公募研究」の別を記入してください。
④ 所属研究機関内で競争的に配分される研究費についても記入してください。

（１）応募中の研究費

資金制度・研究費名・研究期間（配分機関等名）	研究課題名（研究代表者氏名）	役　割（代表・分担の別）	平成２２年度の研究経費（期間全体の額）（千円）	エフォート(%)	研究内容の相違点及び他の研究費に加えて本応募研究課題に応募する理由
【本応募研究課題】 基盤研究（C）（一般） （H22～H　）	土のよる環境造形とサスティナブル・デザインの可能性 （井上明彦）	代表	2383 （4992）	10	

研究機関名	京都市立芸術大学	研究代表者氏名	井上明彦

研究代表者のみ作成・添付

研究費の応募・受入等の状況・エフォート（つづき）

（２）受入予定の研究費

資金制度・研究費名・研究期間（配分機関等名）	研究課題名（研究代表者氏名）	役　割（代表・分担の別）	平成２２年度の研究経費（期間全体の額）（千円）	エフォート(%)	研究内容の相違点及び他の研究費に加えて本応募研究課題に応募する理由
なし					
（３）その他の活動 （上記の（１）、（２）以外で職務として行う研究活動や教育活動等のエフォートを記入してください。）				90	
合　　計 （上記(1)、(2)、(3)のエフォートの合計）				100 (%)	